

大都市ニュータウン在住の雇用労働者夫妻の生活時間・生活様式
 第4報 夫妻の老親扶養の現状と老後の生活設計
 高知大教育 鈴木敏子

目的：「新しい生活様式の創造」を課題にする場合、われわれは「ゆりかごから墓場まで」のライフサイクルという縦線も視点にすえる。なぜなら、それぞれの家族や個人の生活は将来を展望して営まれることが重要であるし、また地域には乳児から高齢者まで、あらゆる年齢階層が居住しているからである。そうしてみると、ニュータウンのような計画都市は高齢化社会にどの程度対応しようとしているのか、さらには、高齢化社会に向けて計画都市はどうあったらよいかということを探ることは重要な課題になってくる。そこで本報は、ニュータウン在住の雇用労働者夫妻が老親をどのように受け入れており、また自らの老後の生活設計をどのように考えているかということについて明らかにしようとする。

方法：第1報に同じ。

結果：夫妻の老親の健在状況は右表のようである。夫妻が老親と同居しているのは夫方の5家族、妻方の2家族、計7家族にすぎず、半数以上の夫妻の老親は全国各地で高齢者世帯を形成している。夫妻の元に老親をよびよせる予定をもつ家族も、夫方4、妻方3にとどまる。老親が同居している家族は、概して所得が高く、住宅は広い。現段階では、高齢者を十分に包みこんだ計画都市にはいたっていないようである。また夫妻にあっても、老後まで見通してニュータウンに居住しているという様子は薄い。

		夫 方					計
		両親	父だけ	母だけ	いない	NA	
妻	両親	39	6	27	11	1	84 (56.0)
	父だけ	3	0	3	4	0	10 (6.7)
	母だけ	19	2	17	6	0	44 (29.3)
夫	いない	2	1	5	4	0	12 (8.0)
	計	63 (42.0)	9 (6.0)	52 (34.7)	25 (16.7)	1 (0.6)	150 (100.0) (100.0)

内有配偶子同居
44.9%

内有配偶子同居 42.7%